

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	看護教員が捉えた看護基礎教育機関で学ぶ社会人経験学生の特徴
別タイトル	Characteristics of adult students studying at basic nursing education institutions as perceived by nursing teachers
作成者（著者）	林, 京子 / 尾立, 篤子
公開者	FD委員会 健康科学ジャーナル編集会(東邦大学健康科学部)
発行日	2023.03.31
ISSN	24343838
掲載情報	東邦大学健康科学ジャーナル. 6. p.35 47.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	原著
著者版フラグ	publisher
JaLCOI	info:doi/10.14994/tohohsj.6.35
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD28215527">https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD28215527</a>

## 看護教員が捉えた看護基礎教育機関で学ぶ社会人経験学生の特徴

林 京子 尾立 篤子

我が国の少子化、18歳人口の減少に伴い、看護基礎教育機関は現役学生数の減少を見据えた対策が必要になってくる。社会人経験学生のような様々な背景を持つ学生の特徴を理解し、教育体制を整えることもその対策の一つである。本研究の目的は、看護教員が社会人経験学生の特徴をどのように捉えているのかを明らかにすることである。教育経験年数3年以上の看護教員11名を研究対象とし、半構造化面接で得たデータを質的帰納的に分析した。その結果、看護教員が捉えた社会人経験学生の特徴について、《明確な目的意識》《自立した関係性への志向》《加齢や多重役割に関連した課題》《年齢に関連した自己庇護の傾向》《看護のリアリティから得られる手応え》《看護に活かされる社会人経験》のカテゴリーが抽出された。看護教員は、社会人経験学生の特徴を認識し、社会経験を尊重しながら看護の専門性を育てていくことの重要性が示唆された。

キーワード 社会人経験学生 多様性 特徴 学習支援

### I. 序論

保健・医療・福祉の人的資源と財源が限界を迎えている中で、国民の医療・介護ニーズは増大し、多様化・複雑化している（日本看護協会,2015）。日本の2021年の合計特殊出生率（厚生労働省, 2021）は、1.30で6年連続低下しており、18歳人口についても、減少が予測されている（文部科学省, 2018）。このような少子化・労働人口の減少に対し、国は、「看護師養成所における社会人経験者の受け入れ準備・支援のための指針」を示し、看護職の確保に努めている（厚生労働省, 2015年）。更に景気の低迷などの社会情勢もあり、大学を卒業後または看護以外の職業を経験してから看護師を志し看護基礎教育機関に入学してくる学生（以下、「社会人経験学生」とする）が増えている。このような社会人経験学生は高校を卒業した後すぐに入学してくる現役学生と共に学ぶが、社会人経験学生の教育は現役学生と同様の方法では合わないことが明らかになっている。（小濱, 2002）。そのため、看護基礎教育課程の教員は、社会人経験学生の特徴を捉えた、より効果的な教育方法を検討していく責務に直面している。現代の看護基礎教育機関では、20歳未満から40歳以上

まで幅広い年代の学生が学んでいる。本邦の看護系大学は20歳未満の入学者が98%を占め現役学生が多い状況である。それに対し看護専門学校は、20歳未満の入学者が82%であり、40歳以上の学生が400名在籍している（厚生労働省, 2021）。特に社会人経験学生の在籍人数が、看護系大学に比べて多い看護専門学校においては、深刻な課題と言える。

看護基礎教育における社会人経験学生に関する報告では、学生生活に焦点をあてたもの、看護教員による支援に焦点を当てたもの等がある。学生生活における報告では、社会人経験学生が、看護師になるという明確な目的意識と自己肯定感を持ち、立場をわきまえ周りを気遣いながら目標達成に向けて学んでいる（片山, 長谷川, 2017）といった社会人経験学生の優れた側面が報告されている。また社会人経験学生の学びの深化に関連する因子として、学習への満足・努力、実習での学び、良好な人間関係が挙げられている（魚住, 近藤, 野田, 2015）。一方、社会人経験学生は、学業（実習）と私生活の調整が必要（三木, 關戸, 檀原, 2014）であり、「現役生との関係性」、「教員との関係性」、「年齢の心配」、「家族の心配」等の困難を抱え

ていることも報告されている（迫田，梅田，清水，2014）。また社会人経験学生と現役学生を比較した報告では、学習意欲を規定する「入学動機」、「入学後の適応度」、「職業観」、「学習に必要な資質」のすべての項目で社会人経験学生が有意（ $p < 0.05$ ）に高い値を示しており、両者の間には違いがあることが明らかになっている（原，2015）。看護教員はこうした違いを持つ社会人経験学生と現役学生に対し同時に教育・指導に携わっている。看護教員の支援に焦点を当てた報告では、看護教員もまた、社会人経験学生に教育を行う際、「学生間の関係性における壁」、「学習阻害要因の存在」、「柔軟な学習態度の不足」、「経験に基づいた学習」、「不十分なリフレクション」、「学校に対する批判的な態度」といった困難を感じていることが明らかになっている（渡邊，鈴木，常盤，2012）。これらのことは、教員自身が現役生とは異なる社会人経験学生の特徴を認識し、意図的に捉えた効果的な研究を検討する必要性を示唆しているといえる。

社会人経験学生と看護教員を対象にした研究では、学習支援に関する両者の認識に差があることが明らかになっている（三木，關戸，檀原，2015）。これは、看護教員が行う学習支援が、社会人経験学生の要望や学修目標と乖離する可能性があることを示唆している。それゆえ、社会人経験学生に対するより良い学習支援を検討する上では、社会人経験学生からの視点だけでなく、社会人経験学生の特徴をどのように捉えているのか、教員の視点でその全貌を明らかにする必要がある。加えて今後の教育のあり方を考えていく上で、教育を行う看護教員側の認識を分析する視点が必要である。しかしながら、教育を担う側の看護教員が社会人経験学生の特徴をどのように捉えているのかについては、研究が少なく全容が明らかになっているとは言えない。

そこで本研究は、社会人経験学生が多く在籍する看護専門学校において看護基礎教育に携わる教員を対象とし、看護教員が捉えた社会人

経験学生の特徴を明らかにする。本研究の結果は、今後、看護教員が社会人経験学生の要望や学修目標を捉えたより良い学習支援方法を検討する上での基礎的資料として活用できる。

## II. 研究目的

本研究の目的は、看護教員が、年齢、学歴、生活体験等において異なる背景を持つ社会人経験学生の特徴をどのように捉えているのかを明らかにすることである。

## III. 用語の定義

本研究における「社会人経験学生」とは、看護以外の大学、短期大学、専門学校を卒業しているか、または就業等の社会経験を持つ学生のことをいう。

## IV. 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究は、半構造化面接法による質的帰納的研究である。

### 2. 研究対象者の選定

本研究の対象者は、関東甲信越圏内の看護基礎教育機関である看護専門学校で社会人経験学生への教育経験を有する看護教員とした。教員経験年数については看護教員ラダー（看護学校協議会,2018）を参照し、指導・助言がなくても自分の判断で教員の仕事を行う一人前期にあたる教員経験年数3年以上とした。機縁法に基づき関東甲信越圏内の看護基礎教育機関の管理者宛に調査協力を文書にて依頼し、承諾を得られた5校に勤務する看護教員を調査対象とした。社会人経験学生への教育経験を有し熱意を持って看護教育に取り組んでいる看護教員を推薦してもらった。推薦を受けた看護教員に、研究者が直接連絡をして文書と口頭で研究の内容を説明し承諾を得た。

### 3. データ収集期間及び方法

データ収集期間は2018年12月～2019年5月で

あった。研究協力の同意が得られた看護教員に対し、一人につき一回、60分程度の半構造化面接を実施した。面接は、プライバシーが確保できる個室を使用して行った。インタビューガイドを参考に、社会人経験学生の背景、社会人経験学生に対する教育経験、社会人経験学生の特徴について語ってもらった。面接内容は、研究対象者の許可を得て録音し逐語録を作成しデータとした。

#### 4. データ分析方法

逐語録におこした面接内容を精読した。文脈を変えないよう配慮し、意味のまとまりごとにコード化した。その意味内容を検討し、類似性をもとに整理してカテゴリーの生成を行った。さらに、逐語録を確認しながらカテゴリーの検討・再編を行い、抽象化しテーマの生成を行った。データの解釈や分析過程においては、質的研究の経験を持つ研究者からスーパーバイズを受け信用性の確保に努めた。

#### 5. 倫理的配慮

国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。(承認番号18-Ig-99) 研究への参加については、研究対象者及び研究協力校の管理者に、研究の目的と内容、匿名性の確保、予想される利益とリスク、研究参加のスーパーバイズを受け信用性の確保に努めた。

## V. 結果

### 1. 研究対象者の概要

研究対象者は、研究協力の同意が得られた看護基礎教育機関である看護専門学校5施設の看護教員11名（男性1名、女性10名）であった。臨床経験年数は3年から19年で平均9年、教員経験年数は4年から23年で平均14年、インタビュー時間の平均は62分であった。詳細は表1に示す。

表1 研究対象者の属性とインタビュー時間

研究対象者	年代	臨床経験年数	教員経験年数	性別	インタビュー時間
A	50歳代	10年	23年	女性	74分
B	50歳代	11年	22年	女性	58分
C	50歳代	12年	20年	女性	54分
D	30歳代	3年	8年	女性	62分
E	50歳代	19年	12年	女性	55分
F	50歳代	5年	24年	女性	54分
G	30歳代	9年	7年半	女性	56分
H	50歳代	12年	22年	女性	65分
I	30歳代	11年	4年	女性	73分
J	30歳代	8年	9年	男性	62分
K	30歳代	7年	4年	女性	70分

### 2. 社会人経験学生の背景

社会人経験学生の背景を表2に示す。

### 3. 分析結果

分析の結果、179のコード、16のサブカテゴリー、6つのカテゴリー、3つのテーマが抽出された。看護教員が捉えた社会人経験学生の特徴を表3にまとめた。

次にそれぞれのテーマ、カテゴリー、サブカテゴリーについて説明する。以下、本文中、テーマを【 】, カテゴリーを《 》, サブカテゴリーを〈 〉, 語りを「 」で示す。

#### 1) 看護教員が捉えた社会人経験学生の特徴

##### (1) 【自律への志向】

このテーマは、社会人経験学生が自ら意思決定を行い自分自身で立てた規範に従った行動を目指すという特徴を示し、《明確な目的意識》と《自立した関係性への志向》により構成される。

##### 《明確な目的意識》

看護教員は、社会人経験学生について<将来価値があることに取り組む>意識を持ち、<合目的な行動ができる>と同時に<無駄な努力はしたくない>という特徴があると捉えていた。

表2 社会人経験学生の背景

職歴	介護職、看護助手、臨床工学技士、理学療法士、社会福祉士、救急救命士、歯科衛生士、保育士、医療事務、通訳、検診業務、企業の管理職、警察官、ホテル従業員、プログラマー、営業職
学歴	高卒、大卒、専門学校卒、大学院卒（博士課程）
入学動機	<p>保育士は給料が安いから看護師になりたい</p> <p>企業でプロジェクトリーダーをしていた経験を看護に活かしたい</p> <p>離婚をするので手に職をつけて働くために看護師資格を取る</p> <p>救急救命士の資格を持って看護師になりたい</p> <p>母が看護師だから看護師になりたい</p> <p>ヘルパーで仕事をしている時急変して亡くなった方がいたため慌てずに対応できるようになりたい</p> <p>病んで亡くなっていく方を看護で支えたい</p> <p>看護助手で言われたことを訳も分からずやることに疑問を持ち生きていくために手に職をつけたい</p> <p>子供を一人で育てて生きていかなければならない</p> <p>看護助手は周囲の人の指示で動き自分の判断が発揮できないため資格を取り自分の判断で直接患者さんをケアしたい</p> <p>マザーテレサに影響を受け看護職を目指した</p>

表3 社会人経験学生の特徴

テーマ	カテゴリー	サブカテゴリー
自律への志向	明確な目的意識	将来価値があることに取り組む
		合目的な行動ができる
	自立した関係性への志向	無駄な努力はしたくない
		依存性のない人間関係を好む
自尊心との葛藤	加齢や多重役割に関連した課題	共通項に基づいたコミュニティを作る
		自立した人間関係の中で学びあいたい
	年齢に関連した自己庇護の傾向	年齢相応の感覚機能低下や記憶力の低下により学習に支障をきたす
		多重役割を持つことにより学習に支障をきたす
豊かな生活体験	看護のリアリティから得られる手応え	ありのままを表現しない
		自分の価値を高く見せようとする
	看護に活かされる社会人経験	自分の能力を過信した行動をとる
		看護実践でしか得られない感情を体験をする
		実習で看護の楽しさを知ることにより自ら学びを深めていく
		「一を聞いて十を知る」高い学習能力を持つ
		学習の場の空気が読める
		生活体験の豊かさを看護につなげられる

看護教員が捉えた社会人経験学生は、病んで亡くなっていくような方達を看護で支えたいという思いを持つ一方で、「シングルの親として子育てをするため」や「介護職の時はできなかった急変時の対応を行いたい」「経済的事情のため」等、今後生きていくために看護師資格を取得し、収入を得る手段を得たいという将来を見据えた職業選択をしている特徴があった。さらに、入学前の教育機関で単位を取得しており看護基礎教育機関で単位認定されている科目を聴講し、教員に課題の量や内容について疑問に思ったことを質問してくるなど入学後も〈将来価値があることに取り組む〉姿勢を持っていた。また、高校生の子供とともに勉強し家庭と学業の両立をするなど〈含目的的な行動ができる〉という特徴があった。しかし中には、「資格取得を目標にしているため、試験で6割取ればよいという考えからそれ以上のことしたがない」「実習に合格するために『どういう風にしたら正解ですか』と看護の正解を聞こうとする」「受かりやすい教員に技術試験を依頼する」等の行動をとる社会人経験学生も存在し、無益な活動を避け効率的に学びたいという〈無駄な努力はしたくない〉意識が強い特徴が捉えられていた。

*「看護助手の時は、言われたことを訳も分からずやっていたと言う思いと、手に職をつけられたら良いという『生きていくため』のようなところもあったようです。」*

#### 《自立した関係性への志向》

看護教員は社会人経験学生について、〈依存性のない人間関係を好む〉ため〈共通項に基づいたコミュニティを作る〉など、対等で〈自立した人間関係の中で学びあいたい〉と考える特徴があると捉えていた。

看護教員が捉えた社会人経験学生は〈依存性のない人間関係を好む〉特徴がみられた。社会人経験学生同士の関係性においては、きずなが

強いグループと一人で過ごしている人に分かれ、現役学生との関係性においては、実習中自分も自信がない中で頼られることに負担感を感じる学生がいた。そして看護教員は、多くの社会人経験学生について、キャリアがあっても目線を下げて現役生からも教わろうとする姿勢を持つと捉えていた。また、自由にグループを作る場面では、社会人経験学生同士でグループを作り、グループ間のネットワークを活用しながら〈共通項に基づいたコミュニティを作る〉を試みしていると捉えていた。さらに、グループで活動する授業については、自分以外にも社会人がいるグループ編成を望み、活発な意見交換ができるよう自分の意見に全員が従うようなグループ編成にしないでほしいと希望するなど、対等で〈自立した人間関係の中で学びあいたい〉と考えている特徴があると捉えていた。

*「社会人の学生の中には、自分が意見を言う全員従うようなグループにはしないで下さいって言われた。」*

#### (2) 【自尊心との葛藤】

このテーマは、社会人経験学生が年齢に関連した様々な課題を持ち、現役学生や教員との関係性の中で学んでいるという特徴を示し、《加齢や多重役割に関連した課題》と《年齢に関連した自己庇護の傾向》により構成される。

#### 《加齢や多重役割に関連した課題》

看護教員は、社会人経験学生について、加齢に伴う〈年齢相応の感覚機能低下や記憶力の低下により学習に支障をきたす〉ことや学業と家庭の〈多重役割を持つことにより学習に支障をきたす〉という特徴があると捉えていた。

年齢の高い社会人経験学生は加齢に伴う視力・記憶力の低下等があり、授業内容が覚えられないという不安やパワーポイントの字が見えにくいことを看護教員に訴え、〈年齢相応の感覚機能低下や記憶力の低下により学習に支障を

きたす)特徴があると捉えられていた。逆に年齢が高いことや記憶力の低下を逆手に取り、そのせいでできないと正当化する社会人経験学生もおり、その考え方を短い期間で修正できないという語りがあった。また、社会人経験学生は家庭でも家事・育児や家計を支える役割を担うため、看護教員は、社会人経験学生の欠席が続いた時に、体調か、子供のことか、ストレスか、介護の関係か欠席理由をいろいろ考えるという語りがあった。そして家庭の事情で夜遅くまでアルバイトをしていた学生は遅刻や居眠りが多くなり学校に来なくなったという事例も語られていた。社会人経験学生は子供の学校行事や夜遅い時間のアルバイトの影響で学校を休むなど、学業と家庭の〈多重役割を持つことにより学習に支障をきたす〉と捉えられていた。

「お子さんが低学年だと、もう小学生だからある程度大丈夫だろうと思ったと思うんですけど、実際には授業参観があったり親が手をかける部分もあるというような状況でした。」

#### 《年齢に関連した自己庇護の傾向》

看護教員は社会人経験学生が、感情表出にブレーキをかけ〈ありのままを表現しない〉ことがあり、教員に〈自分の価値を高く見せようとする〉ことや実習中〈自分の能力を過信した行動をとる〉という特徴があると捉えていた。

看護教員は社会人経験学生について、年長者である故の気遣いから、現役学生の行動に違和感があったとしても感情表出を控え〈ありのままを表現しない〉特徴があると捉えていた。また社会人経験学生は成績がよいことが学生の中で上位に位置づけられており点数にこだわる傾向や他の学生より優秀であるということが自分らしさの一部になっているという語りもあった。そのため社会人経験学生は、教員から指導を受けている時に、自分が否定されたと感じるとより強固に自分の意見を主張し、実習後、技術の振り返りシートを記載する際、実施した技

術の中で教員に指導を受けた項目は記載せず、問題なくできた項目のみ記載するなど、できないと思われたくないがゆえに〈自分の価値を高く見せようとする〉という特徴があると捉えていた。また、患者さんの同意を取っただけで教員や指導者に相談せず技術を実施しようとする〈自分の能力を過信した行動をとる〉という特徴があると捉えられていた。

「実習で自分がかっこ悪くなるどころ。計画の発表の日とか。休む。自信がなくて恥をかきそうかなと思うと、身を消すんだね。」

#### (3) 【豊かな生活体験】

このテーマは、社会人経験学生が現役学生にはない社会人経験を持ち、過去の体験を活かしながら看護学生としての新たな体験を積み上げているという特徴を示し、《看護のリアリティから得られる手応え》と《看護に活かされる社会人経験》により構成される。

#### 《看護のリアリティから得られる手応え》

看護教員は社会人経験学生について、〈看護実践でしか得られない感情を体験する〉ことや〈実習で看護の楽しさを知ることで自ら学びを深めていく〉という特徴があると捉えていた。

看護教員は社会人経験学生の特徴について、実習で繰り返される患者との出会いの中で看護に目覚めていくと捉えていた。そしてカンファレンスで他の学生が自分の体験を聞きもらい泣きしてくれた体験や、受け持ち患者が手術後の一番つらい時期に自分が欠席してしまった体験を振り返ることで、今までの社会経験とは違う〈看護実践でしか得られない感情を体験する〉という特徴があると捉えていた。また、看護教員が学力の低い社会人学生に時間をかけて指導したところ、実習で必要な知識・技術が身につき、楽しいという感情が芽生え〈実習で看護の楽しさを知ることで自ら学びを深めていく〉ことができるかと捉えられていた。

「最後にね、患者さんの所から学生が泣いて出てきたの。『苦しいときに君がいてくれてよかった』って言うてくれたんだって。初めてだったんじゃない。」

#### 《看護に活かされる社会人経験》

看護教員は社会人経験学生について〈一を聞いて十を知る高い学習能力を持つ〉ことから〈学習の場の空気が読める〉と捉えていた。そして、社会人経験で培われた〈生活体験の豊かさを看護につなげられる〉能力を持つという特徴を捉えていた。

看護教員は社会人経験学生が、少しの指導で教員の意図をくみ取る〈一を聞いて十を知る高い学習能力を持つ〉という学生の特徴を捉えていた。そして、〈学習の場の空気が読める〉ため、積極的にクラスの役割を引き受け、グループワークでメンバーに入れなかった学生に声をかけてくれるなど周囲に対する気遣いができることを捉えていた。しかし臨床の場では、患者さんの体調を優先するより、援助を後回しにすることでの看護師にかかる迷惑を気にするという空気の読み方をする学生もいると語られていた。また、社会人経験学生は、介護職・公務員・救急救命士・社会福祉士・プログラマー等、多様な背景を持っており、話題が豊富で患者さんとの関係性を築くことが上手な学生が多いと捉えられていた。看護教員は、社会人経験学生が、在宅看護の実習で、訪問同行した際に柔軟にその場面に入っていけること等から〈生活体験の豊かさを看護につなげられる〉と捉えていた。

「訪問すると、柔軟にその場面に入っていけます。帰ってきて、現役学生とは別に、こちらの期待しているところをちゃんと捉えてる。」

## VI. 考察

### 1. 看護教員が捉えた看護基礎教育機関で学ぶ現代の社会人経験学生像

社会人経験学生と高校を卒業後すぐに入学し

てくる現役学生とでは、年齢や生活体験に差があり発達課題も異なる。本研究では、社会人経験学生が《明確な目的意識》と《加齢や多重役割に関連した課題》をもち《看護に活かされる社会人経験》を活用しながら《看護のリアリティから得られる手応え》をもとに学んでいることが明らかになった。看護基礎教育機関で学ぶ社会人経験学生は、加齢による記憶力の低下を努力で補い、実習での成功体験から学ぶ喜びを得て、学習への継続を図っていることがうかがえる。この結果は先行研究（片山 et al.,2017）（渡邊 et al.,2012）（魚住 et al.,2015）と相似しており、看護基礎教育機関で学んでいる社会人経験学生の現状を反映しているといえる。

また、多様な背景を持つ社会人経験学生も、看護においては初学者であり、実習で繰り返される患者との出会いの中で看護に目覚めていく。そして、実習で看護のリアリティに触れることで、看護実践でしか得られない感情を体験していると捉えられていた。石川ら（2016）によると「実習は学生にとって、看護師になるためのアイデンティティ形成への第一歩となり、将来働きたい職業選択の機会になっている」ことが明らかになっている（石川，内海，2016）。また、淵野ら（2008）の研究で、基礎看護学領域に位置づけられる実習は看護師イメージをポジティブに変化させられる実習であることが示されている（淵野，加藤，中野，2008）。社会人経験学生は、年齢相応の感覚機能低下や記憶力の低下に加え、自律性の増大があり行動変容に時間がかかるため、できるだけ早期の実習で対象に必要とされ看護の喜びを実感できる体験の場を提供し、看護を学ぶ動機づけを強化することが重要である。

さらに本研究では、新たに2つの社会人経験学生の特徴が浮かび上がった。

一つ目は、《自立した関係性への志向》である。先行研究では、看護教員を対象にした調査と社会人経験学生を対象とした調査の双方に「現役学生と社会人経験学生の関係性」に対す

る困難が挙げられていた。その理由として、渡邊ら（2012）は、現役学生と社会人経験学生の生活背景の違いが交流の妨げになることを挙げており、迫田ら（2014）は、青年期の発達課題の達成度や目的意識の違いを挙げている。それらに加え本研究では、社会人経験学生は依存性のない人間関係を好むことから、現役学生に頼られることに責任感と負担感を感じており、社会人経験学生のコミュニティを活用して学びたいという、対等で《自立した関係性への志向》をもつことが明らかになった。一方、現役学生の発達段階である青年期は、自己意識の高まりとともに人間関係の構造も変化し、親や教師への依存は否認される傾向にあり、友人関係を中心とした外的世界での依存関係が大きくなるといわれている（西川，2003）。

このように、青年期の依存的な特徴を持つ現役学生と自立した関係性を志向する社会人経験学生とでは、対人関係における意識に違いがあり、看護基礎教育機関の一様ではない教育現場の状況が明らかになった。

二つ目は、《年齢に関連した自己庇護の傾向》である。現役学生の年齢は、18歳から20歳前後で学歴は高校卒であるのに対し、社会人経験学生の年齢は20歳代から50歳代と幅広く、学歴も高校卒から大学院卒までさまざまであった。入学前の職歴も医療職、介護職、地方公務員、一般企業と多岐にわたっていた。看護教員が捉えた社会人経験学生は、現役学生との年齢差を意識し、成績の良さに高い価値を置き、上手くやれている自分を見せようとする特徴があった。看護教員は、社会人経験学生について、感情表出にブレーキをかけ〈ありのままを表現しない〉という特徴があると感じていた。梶田（1995）は、自尊心について「自分自身を無意識のうちに重要なもの、大事に扱われるべきもの、とする内的な感覚」と定義し、「人は自分自身を肯定的に見たいという強い本能的欲求を持っており、どんなに無理をしてでも自分に自信を持ち、高い自尊心と自負心が持てるようでありたい」と願うことを明らかにしている。社

会人経験学生は、年長者としての気負いがあり、自分に不利な局面になると自尊心が傷つけないよう自己防衛しながら心の安定を保っていると考える。

また、社会人経験学生は周りに確認を取らず自己判断で看護を実施するなど、自分の能力を過信した行動をとる特徴があった。社会人経験学生は成人学習者として位置づけられており、成人学習者の成熟のプロセスの中には、依存性から自律性へ向かうという概念が示されている（ノールズ，2002）。また、成人学習者の自律性の増大について、倉内ら（1994）は、「自分自身の判断基準を持ち、自分の立場に立ち、自分の好みがあり、自分に責任を持つことを意味している」と述べ「成人とは簡単に他人のいいなりや思い通りにはならない存在である」と結論づけている（倉内，土井，1994）。つまり社会人経験学生は、成人学習者として自己決定的に学び他者から肯定的な評価を得たいという思いと、失敗を認めたくないという防衛的な思いをもち、自尊心の葛藤の中で学んでいる特徴が明らかになった。したがって、看護教員は、本心が見えにくく簡単には他人のいいなりや思い通りにならない社会人経験学生を困難な存在と捉えず、成人学習者としての特徴を理解した上で対応を考えていく必要がある。

## 2. 将来の価値への意味付け

本研究では、看護教員が社会人経験学生を【自律への志向】を胸に《明確な目的意識》を持ち〈将来価値があることに取り組む〉〈合目的な行動ができる〉という特徴があると捉えていることが明らかになった。社会人経験学生は今後生きていく上で必要な看護師資格を取得するために、社会的なキャリアを中断し入学してきている。そして入学後も、目的に向かって行動することができていると捉えられていた。

しかしその一方で、「合格させてくれそうな教員に技術試験の再試験を依頼する」「教員にマニュアル化された手順や正解を聞こうとする」など時間をかけずに課題をクリアし、要領よく単位を取得しようとする〈無駄な努力はしたく

ない」という社会人経験学生の特徴も明らかになった。その背景として、社会人経験学生は多重役割による時間的制約が多いことや効率を求める社会情勢を反映し学生の働いていた職場も効率重視だったこと等が考えられる。

先行研究では、看護技術演習について、社会人経験学生が、実習場で行われている方法や就職時の即戦力に繋がる内容を重点的に学習したいと強く認識する傾向があり、実用的な看護技術の学習に加えて看護実践のための思考力強化等を意識しながら看護技術演習を行っている教員との間に認識のずれがあることが示されている（三木，關戸，檀原，2015）。看護の専門性は目に見えない思考過程にある（石綿,2002）。そのため看護基礎教育では、対象の健康回復に必要な科学的根拠と対象の個別性に合わせた看護の思考過程を学ばせる必要がある。

社会人経験学生に、目先の効率だけを追い求めず看護専門職として看護の本質を追究していく姿勢を持たなければならないことを理解してもらうためには〈将来価値があることに取り組む〉〈合目的な行動ができる〉という特徴を活かした関りを行うことが重要である。まずは、社会人経験学生の入学動機を看護教員が把握し、目指すべき看護職像を明確化していく。看護教員が社会人経験学生の入学動機を知らなければ、将来に向けた価値づけができない。更に看護師資格取得のみが目的となり、その先のビジョンが描けていない社会人経験学生には、様々な看護の方向性を示す。社会人経験学生が未来の自分をイメージし、何が将来の自分にとって有益なのかを考えてもらうことが、〈将来価値があることに取り組む〉姿勢を強化することにつながると考える。

### 3. 豊かな生活体験を活かす

看護教員は、社会人経験学生が【豊かな生活体験】を基に学んでいると捉えていることが明らかになった。成人学習理論では、成人学習者の経験を自分や他者のための貴重な教材となる資源と位置づけている。ノールズ（2002）は、

成人学習者の経験について、アイデンティティを引き出すために必要なものであり、彼らの経験が活用されない状況にいることやその価値が見下されていることがわかると、単にその経験のみが拒絶されているのではなく、人間としても拒絶されているように感じると述べている。高校以降の大学教育や専門レベルの教育では、人から「習う」受動的な姿勢から自ら「学ぶ」能動的な姿勢に変われる教育の転換が必要になる（神郡,2018）。看護教員は、プライバシーへの配慮を行った上で、社会人経験の豊かな人生経験を引き出し、過去の経験と関連付けながら学びを深めていけるように支援することが能動的な学びにつながると考える。看護教員が社会人経験学生の背景を知らなければ、経験を活用することができない。日ごろから社会人経験学生とコミュニケーションをとり、社会人経験学生の背景や価値観を知ることが重要である。しかし、過去を公にたくない社会人経験学生の存在も推測されるため、情報の取り扱いには十分な注意が必要である。

また、看護教員が捉えた社会人経験学生の特徴の一つに《学習の場の空気を読む》というカテゴリーが抽出された。社会人経験学生は「クラスの役割を率先して引き受ける」「グループに入れない学生に声をかける」など周囲の状況を察して行動する能力が高いことが明らかになった。その一方で、「患者さんの状態より看護師の業務を気にして援助計画を立てる」という空気の読み方をする学生についても語られていた。看護の初学者である社会人経験学生に対しては看護の視点で物事を捉えられるような働きかけが必要である。

パースペクティブ変容理論（メジロー，2012）では、成人は過去の経験に基づく枠組みを通して世の中を見ており、成人にとっての学習とは自分の経験の意味についての新しい、あるいは修正した解釈を分析するプロセスであると定義している。したがって、教育者の役割は、学習者が基づいている前提を明らかにし、精査することの支援であるといえる（赤尾,2021）。

看護教員は、社会人経験学生がどのような人生を歩んできた人なのかを把握し、そこからどのような枠組みで物事を見ているのかを知ることが指導の第一歩となる。それに伴い看護教員も自らの認識の枠組みを意識し、育てやすい学生を求めて枠にはめようとしていないかについて省察する必要があると考える。

#### 4. これからの看護基礎教育への適用

日本の人口は10年連続で減少しており、少子高齢化による労働力不足を補うため、外国からの労働者の受け入れが推進されている（内閣府，2022）。看護職は、外国人患者への対応や外国人看護師との協働のために、対象の持つ多様な背景を理解する視点が必要となる。看護の対象者だけでなく、看護チームの中にも多様性や多文化が存在することで、看護の対象である人々を深く理解し、文化的にも個別性においても相手を尊重して、良いケアの提供につながる。（竹熊，2018）。また、多様な人材の登用が、組織のパフォーマンスを上げるという考え方も広がっている（吉沢，2018）。更に人口構造・産業構造・社会構造が大きく変わる中、大学における社会人受入れの促進は、社会全体の課題への対応策として取り組まれるべきであるという国の方針（文部科学省，2010）が打ち出されている。

現役学生にはない学歴や職歴をもち、豊かな生活体験をもとに学んでいる社会人経験学生は、看護に関連した知識・経験を持っているという点で現役学生とは異なる。看護教員は、それぞれ人生経験のあるさまざまな年齢や背景の学生を指導するという課題に直面しているだけでなく、様々なレベルの技術的な適性と時間に対する複雑な要求を持つ学生を教授するという課題に直面している（Billings Diane M, Judith A. Halstead, 2021）。看護系大学は右肩上がりに増加しており、大学全入時代を迎えるにあたり、今後大学教育においても社会人経験学生の増加が見込まれる。本研究では、看護教員が捉えた社会人経験学生の特徴を明らかに

し、社会人経験学生を一律に扱うのではなく、背景に合わせた個別の対応が必要であることが導き出された。この研究の知見は、今後看護系大学で社会人経験学生の教育を行う教員の質の向上に役立つ。

## Ⅶ. 結論

看護教員が捉えた看護基礎教育機関で学ぶ社会人経験学生の特徴について以下の結論を得た。

1. 看護教員は社会人経験学生が依存性のない人間関係を好み、対等で《自立した関係性への志向》をもつという特徴があると捉えていた。
2. 看護教員は社会人経験学生が【自尊心との葛藤】を抱えながら学校生活を送っている特徴があると捉えていた。
3. 青年期の依存的な特徴を持つ現役学生と自立した関係性を志向する社会人経験学生の間には、対人関係における意識の違いがある。
4. 看護教員は現代の社会人経験学生の特徴を認識し、社会人経験学生の社会経験を尊重しながら看護の専門性を育てていくことが重要である。

## Ⅷ. 研究の限界と今後の課題

本研究では社会人経験学生の特徴が導き出された。今回は、看護基礎教育機関の中でも社会人経験学生の就学割合が多い看護専門学校の教員を研究対象者にしていたため、その他の看護基礎教育機関のデータは扱えていない。また、研究対象者の年齢・性別に偏りがあった。今後、社会人経験学生の増加が予想される大学・短期大学を対象に調査を継続することにより、社会人経験学生への対応を一層明確にしていく必要がある。

## Ⅸ. 謝辞

本研究をまとめるにあたり、研究の趣旨をご

理解いただき協力くださいました看護基礎教育機関の皆様方に深く感謝申し上げます。

## X. 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

本稿は、国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものであり、本研究の一部を第31回日本看護学教育学会学術集会にて発表している。

## 引用文献

- 赤尾勝己. (2002). 成人学習者の認識変容メカニズム—欧米の成人教育理論の成果を手がかりに一教育科学セミナー.P1-12
- Billings Diane M, Judith A.Halstead, 奥宮 暁子 (翻訳), 小林 美子 (翻訳), 佐々木 順子 (翻訳). (2021) 看護を教授すること第6版 医歯薬出版. P15
- 刈野由夏,加藤法子,中野榮子ら (2008) : 基礎看護実習 I の実習前後における看護師イメージ変化の比較検討.福岡県立大学看護学研究紀要;5 (2) :89-96.
- 原ちひろ. (2015) : 看護専門学校における社会人学生と現役生の学習意欲の検討.日本看護学会論文集 看護教育;45号:55-58
- 石川恵子,内海桃絵. (2016) : 看護学生における臨地実習へのモチベーション.京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要;11:11-16.
- 石綿啓子. (2002) 看護の専門職性に関する研究—看護教育の基礎付けとして—文教大学附属教育研究所紀要 第11号75-82
- 一般社団法人看護学校協議会. (2018) : 看護教員のラダー[http://www.nihonkango.org/pdf/new\\_181225.pdf](http://www.nihonkango.org/pdf/new_181225.pdf) 2021.9.10
- 梶田叡一. (1995) : 自己意識の心理学.東京:東京大学出版会,94.
- 片山美穂,長谷川雅美. (2017) : 看護専門学校に在学する社会人学生の学校生活に対する意識の構造について.看護実践学会誌, 29巻2号:31-39.
- 神郡博. (2018) 看護教育を支える視点と展開 看護の科学社. P6
- マルカム・ノールズ.堀薫夫他訳. (2002). 成人教育の現代的実践—ペタゴジーからアンドラゴジーへ、38. 鳳書房16-17.49-50
- 倉内史郎,土井利樹. (1994) : 成人学習論と生涯学習計画.亜紀書房,13-16.
- 厚生労働省. (2021) 統計一覧.看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査[www.mhlw.go.jp/toukei/list/100-1.html](http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/100-1.html) 2021.10.10
- 厚生労働省. (2015) : 看護師養成所における社会人経験者の受け入れ準備・支援のための指針 <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000079702.html> 2022.6.20
- 厚生労働省. (2021) : 人口動態統計 (確定数) の概況 | 厚生労働省<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei21/index.html>.2022.10.17
- 小濱優子. (2002) : 社会人の学習支援に関する研究.教育研究紀要;第11号.83-90.
- ジャック メジロー, 金澤陸 (監訳) . (2012). おとなの学びと変容 変容的学習とは何か.鳳書房. 3-18
- 三木隆子,關戸啓子,檀原いづみ. (2015) : 3年課程看護専修学校の社会人学生と教員のもつ「学習および学習支援」に関する認識の違い. 四国大学紀要 2015;35-48
- 三木隆子,關戸啓子,檀原いづみ. (2014) : 社会人経験を持つ3年課程看護専修学校生の学習支援の在り方—社会人学生と教員に半構造化面接を行って—. *International Nursing Care Research*: (1347-1341) 13巻3号 : 155-165
- 文部科学省高等教育局. (2018) : 18歳人口と高等教育機関への進学率等の推移. <https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kihon5/1kai/siryoo6-2-7.pdf> 2019.10.5
- 文部科学省中央教育審議会. (2010) : 大学における社会人の受入れの促進について (論点整理) [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/)

chukyo/chukyo4/houkoku/1293381.htm  
2019.11.12

内閣府. (2022) : 経済財政運営と改革の基本方針  
2022 [https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/  
cabinet/2022/decision0607.html](https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/cabinet/2022/decision0607.html) 2022.12.5

西川隆蔵. (2013) : 対人依存行動の研究-対人依  
存の自己制御と自己意識、ソーシャルスキル、  
及び対人適応感との関係の検討. 人間文化学  
部研究年報, (5) :1-19.

日本看護協会. (2015). 「2025年に向けた看護の  
挑戦 看護の将来ビジョン〜いのち・暮らし・  
尊厳をまもり支える看護」  
[https://www.nurse.or.jp/home/about/vision/  
pdf/vision-4C.pdf](https://www.nurse.or.jp/home/about/vision/pdf/vision-4C.pdf) 2022.10.12

迫田智子,梅田尚子,清水るみ子. (2014) : 社会人  
経験のある看護学生の就学上の困難と学業継続  
への対処 : 日本看護学会論文集 2014;44号:321-  
324.

竹熊カツマタ麻子. (2018) . 「なぜ看護におけ  
るダイバーシティが重要なのか」 .看護管理,  
Vol.28 N008P691. 688-691

魚住郁子,近藤裕子,野田貴代. (2015) .社会人  
経験のある看護学生が学校生活の中で学び  
つづけていくプロセス:学びの深化に関わる  
体験の語りに注目して.日本看護学教育学会  
誌,25 (1) ,41-50.

渡邊恵,鈴木玲子,常盤文枝. (2012). 看護教員  
が認識する社会人経験のある学生の学習者  
としての特徴と教育の困難感.日本看護学会  
論文集 看護教育;43号:106-109

渡邊恵,鈴木玲子,常盤文枝. (2014). 看護専門  
学校 (3年課程) における社会人経験のある  
学生に対する教育方法の現状分析. 看護学教  
育学会誌;24 (1) :55-65

吉沢豊予子. (2018) : 「家族のダイバーシティ」を  
3方向から探る. 看護教育, NOV.Vol.59 P948.

## Characteristics of adult students studying at basic nursing education institutions as perceived by nursing teachers

Kyoko Hayashi     Atsuko Aures

Toho University

With Japan's declining birthrate and declining population of 18-year-olds, basic nursing education institutions will need to take measures in anticipation of a decrease in the number of non-adult full-time students. One of the measures is to understand the characteristics of students with various backgrounds, such as adult students (aged over 18 who have resumed school-study after graduation from university/college, junior college or vocation school, or with work experience), and to make arrangements for education of such students. The purpose of this study is to understand how nursing teachers perceive the characteristics of adult students. The subjects were 11 nursing teachers with more than 3 years of nursing teaching experience. The data was obtained in semi-structured interviews and analyzed qualitatively and inductively. As a result, the characteristics of adult students according to nursing faculty were <clear sense of purpose>, <orientation toward maintaining independent relations>, <have issues related to aging and a various role>, <age-related self-protection tendencies>, <attitudes learned from nursing experiences>, and <experiences as adults which will be utilized in nursing> categories were extracted. These results suggest that nursing teachers need to be aware of the characteristics of adult students and develop their nursing expertise while respecting their social experience.

Keywords adult students   diversity characteristics learning support